狂の声 2-二号の感想ほか

久米島から帰って

こんどは一しょに旅して、重くしかも複雑な久米島問題に少しばかりふれることができました。現地の一事件から天皇制の本質に迫るといった、いわば「正」の方法、態度からだけではとても事実にふれ得ないものを感じてきました。極限の情況とは、いわば、この世の地獄のことだと思います。差別という不条理が戦争によって、いっきょに地獄の様相に変る。私には戦争こそが第一義的の問題であるようにおもわれました。人が自分にもそむいて生きねばならないのが戦争というものでないでしょうか。自分がもし一島民として当時の久米島にいたら、どうしただろうかと考えると慄然としてしまいます。

事実を事実としてみるためには、地獄を共に経めぐる体験の共有を必要としないものでしょうか。現存在として、すでに事実からきりはなされている自己をみるばかりです。久米島だけでなく、それぞれに固有の意味をもつ事実にふれるたびに、ある種の断念—つまり想像や論理でもつなげていけない人の性の悲しみにぶつかって、言葉を失ってしまうのです。

わずかに「マクマオ」の木々にいたわられながら辛うじて耐えている痛魂碑の霊を前にして言葉もなく、ただ死者たちとのへだたりを感じてしまうのです。しかし救いは、富村さんであり、仲村　さんです。富村さんの激しい生き方、堂々とした自我の貫徹、仲村渠さんが軍隊経験で得た大和幻想、軍隊への期待—への本質的批判、それを語るときの内に秘められている、ほこり高い自負のほとばしりに打たれました。

これも日頃考えていることですが目にみえない差別というとき、差別している側の問題は、いうまでもないことですが、実は差別される側がそれを受け入れてしまうときから、真の差別、差別の実体化がはじまるのではないでしょうか。

自己の正しさを様々な仕方で確信して生きている沖縄の人々にあえて

とてもよかったと思います。私はいま沖縄でのささやかなふれあいをとおしてひとつの夢をみています。

四八番目の県に位置づけられることをかたくなに拒否している人々が南の島の文化を、総体として自立させ、日本と世界に向けて、自らを開くことの可能をおもうのです。

私達も共に努力するなかで、日本がヤポネシヤ文化としての源流に還るとき、そこには、アイヌ人—本島人—沖縄人の連合、それにいわゆる祖国の統一ということをもつきぬけて、より重い普遍へと向わなければ真の救いのない在日朝鮮人が独自の文化をつくりあげて、大連合を形成するという夢をみています。

Mさんの話によると、復帰後の沖縄が、伝統とその継承をとおして、求心的の方向へ流れを変えてきているとのこと。それがまだ小さな芽であろうと、本当の自立への願いがこめられているようにおもいます。ただ若い女性が、いつ東京志向、本土志向から自らをたち切るかが問題ですね。

世の中はなべて男と女で成り立つものである限り、沖縄の青年が沖縄の女性と共に、それぞれの島を豊かにいろどる日が近いことを願わずにいられません。単に経済の問題に還元してしまってはならないとおもいます。

（I・K）

「血の水曜日」

八月二二日〜十月八日の間タイにおりました。

十月六日・「血の水曜日」私は、「タイ国を混乱させる目的で侵入した外国の共産主義者」として追われ殺されそうになりました。軍放送は「つかまえてツルせ！」どアジり、軍・警・右翼が私を探したのです。

クーを起こすには学生たちを王室を侮辱したアカと決めつけること（狂信的国粋主義の鼓舞）と外からの介入のデッチアゲ（反共的排外主義の扇動）とが必要であり、幅広くタイの学生民衆の運動とつきあっていた私をスケープ・ゴートにしようとしたのです。逃げ場を失ないどうみても助からないと思ったとき、私は「殺されるとき『日本人だから、外国人だから助けてくれ』ということだけは言わない」ということを最少限守るべき原則と決めました。結果

としては生きて帰ってきましたが、どたんばで考え、思い定めたこの原則は今でも正しいと思っています。

安易にアジアに出かけることには私自身批判的ですが、「アジア人とともに生きる」ために運動する人々は、これからは程度の差はあれ私の経験したようなことに、どこかでゆきあたるのではないかと思います。その時日本大使館に保護を求めず、最後まで「日本人だ」となのらないで抵抗して死ぬことを求める立場はひとつの思想としてあり得るのではないかと私は思うのです。

といっても、私はとにかく恐かった。その恐さの極点で以上のべたことを自分をなんとか落着かせようともがきながら、やっと考えついたのだということを私は正直に申し上げたいと思います。

あのときどんな顔をしていたのだろうかと今になって思っているのです。

（井上澄夫）

〝抵抗権〟をめぐつて

私は「小西誠反軍裁判」にかかわろうとしています。

小西は「ビラ」の中で〝人民武装権〟を提起しています。矛盾しているかもしれませんが、私は〝人民武装権＝抵抗権〟は、当然のことであって、人民がどういう方法で抵抗するかは、人民自身の問題であると考えています。

とはいいながら、長谷川修児さんの「人民総武装は、世界各国の核武装と同じ論理に……」にも同感せざるをえないというのは「…戦争がいかに革命を目的にしようとも、そのめざす革命より、さらに残虐な重圧に人民をあえがせることになるとともに打倒しようとする国家体制と権力を別のかたちのもとにつくり出す—という繰返しを生むにすぎない」と私も思うからです。しかし一方で「反植民地闘争」「被支配者の武装闘争」「解放闘争」に対してもふっきれないものがあります。

ここからここまで「暴力」で、ここからここまで「非暴力」だからということをあらかじめ明確に論理づけて「行動」をしているのではなくいわば「直観」みたいなものです。

人間が何よりも優先され、内ゲバを起こさず、目的が手段の中に没せず、つねに手段の中に目的の意味が

内包している―そうした方法、やり方でもって闘いを組んでいく方向を見い出していかねばならないと思います。

と同時に「抵抗権」としての反権力闘争、武装闘争を決して孤立化させてはならない―と思うのです。

（O・O）

提案にたいして

直接行動2号二七頁、提案に対して―非暴力直接行動によって、国家権力という暴力（もしくは暴力組織）を廃する（ないしはそれと闘う）ことができるか？

我々は、望み得る限り、暴力を使用するべきではない。しかし、暴力は最終的な決定権を有する、人間と不可欠だ。この前世紀からの汚物はまだ我々の代ではふっ切れまい。

非暴力の限界は明白である。それをアピールする機関、あるいは手段が必要であるという事と、それによって大衆が動くという予測が必要とされる。また、その大衆がある程度自己の主張を、実行し得る自由がなければならない、という状況の条件が必要である。

日本の現状において、非暴力無抵抗運動は、大へん難かしいものであろう。日本の民衆ばかりでなく、世界的傾向ではあるのだが、ほとんどの地域で、一般大衆はあらゆる機構の操作をうけている。

一、政治操作→国家機構、地方自治体等。

二、経済操作→金・流通バイ体、信用制

三、情報操作→マスコミ（テレビ、ラジオ、新聞）

四、教育操作→教育機関（小児よりの条件制限）

五、文化・慣習操作→道徳・常識・慣習

六、その他

これらの操作（マニュピレイト）は、コントロール（支配）とは異って、直接的なものではない。例えばコマーシャルは命令しない。よく見せ、効用をねつ造する。それによって、本来不必要な欲求をさそい、売りつけようとする、経済的情報操作である。政治的情報操作では、例えば機動隊と学生が激突する場面を、テレビ等マスコミが報道する。この時、学生が投石する場面ばかりを写

し、機動隊が防いでいるところばかりを写すと大衆は学生を非難する。こういった情報が乱れとぶ中で、民衆は、果して正しい結論を出す事がどの程度可能だろうか。そのパーセンテージはかなり低い。

この様に、非暴力抵抗運動が、実効を表すまでには、大へんな難問が山積みすることとなる。これらの操作を、全てくつがえすだけの、説得力のあるものでなくてはならないからである。

だが、私はその効果を決して無視することはできない。それは確かに強力な運動の基礎を形成することができる。

従って、設問にはこう答えよう。非暴力直接行動は、大衆を動かす力の基礎を形成できる。だから、大衆の行動の方向性は規定できないとしても、原動力を発するための媒体になり得るわけだ。これは権力に対抗し得る手段となる。

直接的な権力解体の手段としてはこれはあまりにも、多くの犠牲を必要とし、方向性を規定することができない。ために、国家権力を廃する事は、ほとんど不可能であると考え得る。悪くすると、国家そのものを残し、後にまた、現在のインドのように、強権国家となる可能性もある。

非暴力とは何か、という設問

二次論的に、暴力・非暴力という区分を設けるだけでは、解決にならない。明らかに三元論的解釈が必要である。すなわち、暴力・非暴力・反暴力。

暴力は一応、他を制圧するための物理的、具体的な力である。他の意志を規制する目的のために用いられるパワーである。

非暴力とは、その力を所有していない場合、あるいは所有しない、所有していても使用しない、という状況下にある、あるいは人の行為である。

このとらえ方を用いれば、一応現実的に、分析が可能となるはずだ。現実の具体的諸例に対しては、この三元論でも、不充分ではある。しかし、その行為が、どの概念に基礎を置いているか、という事を考えればある程度、非暴力の位相は、とらえる事が可能だろう。

＜提案＞

みなさん、多元論でやってみませんか。この現実で戦ってゆくには、

ある程度、スーパーマンでなければならないんです。

我々は、負の位置に立つことから始めなければならない。全ての物を判断するときに、我々は既成の知識にたよっている。しかし、これだけでは、不充分であることを知っていなくてはならない。全ての事がらの裏側を見、正面と対比させながら、バランスのとれた、認識点を持たねばならないのデス。おそらくイマジネーションの貧困な人には、むつかしいかもしれない。

正・無・負の三元論の考え方を基礎におけば、我々は三通りの人格を持ち、三つの人生を、同時に生きるという、はなれわざをやることになる。その中に答がある。

あるか、なしか、の二元論は、カントで終らせましょう。そして、頭の古い連中に、いじくらせておきましょう。我々は、進んで新しい思考パターンを作ってゆかねばならない—そう考えるのです。（SEA）

法王庁的なもの

「WRI日本の宣言」は、私たちひとりひとりの宣言であるにもかかわらず教条的・ストイックに概念表示されると絶体者への宣誓のような外からの強制を感じさせられ、登録となると自己確認というものの、WRI法王庁的むものが感じられ、向井さん自身WRI日本の小法王的な教理的な自己肯定が文章のはしはしからにおってきて抵抗を感じます。

「直接行動」の読み方ひとつにしても、高い雑誌を売りつけておいて読み方がどうのこうのと読み方まで云々する態度。「仲間の通信」のなかにもかなり卒直な批判があるようですが—。

私はアナキズムの中で好きな言葉は「自由発意と自由合意」ということばです。否定面だけでなく肯定面が創造されねば重苦しくなるだけです。（栗原貞子）

〈ウリ宣言〉の要締は

〈なかまの声〉非常におもしろいし有益です。なかには何度か読んだものもあり、Hさんなど一方的ですが知っていて、つながりのおもしろさを感じます。

1号の「なぜウリか」について—

〈戦争は頭の中もつくりかえてしまうし、物理的抵抗なんて、とても考えられないことから反戦は出発すべしの点、現在はあまりに日常の経験から連想され、類比されることを絶対視しすぎると思っているので、この部分に賛同〉―ような点への、注意の反応が見られないので、そんなもんかと思い、向井さんが言われるように反応の多様の中の一つなのだろうと了解します。

中日新聞のコラムにも、ある戦中派が戦無派に「どうして徴兵を拒否して山に逃げなかったのか」と―多分こともなげに―言われて、シラケてしまったことが記されていた。

これによれば、徴兵拒否がなされなかったことが、そうしなかった人の、何かうかつさにでもよるという風に思え、拒否することの精神的＝思想的・身体的難かしさに、想像力が及んでいないかの如くです。

多分、戦争というものに対して、直接個人としては、対することが不可能だと思います。つまり個人は、家族をとおし、地域をとおし、国家をとおして戦争というものに対する他ないわけです。

もともと〈ウリ宣言〉にいう戦争の拒否は、各国間、地域間の対立は戦争で解決するよりも話し合いで解決した方がよいなどという根本主義に根ざすものではないでしょう。世の中に話し合いの前にする戦争なんて、少なくとも公式的にはありはしないのだから。いつも話し合いで橋渡し不可能の溝を戦争で埋めてしまうという形をとるわけですから。とすれば殊更にする―変な表現ですが―〈ウリ宣言〉の要諦は絶対不戦・非戦ということだと思います。

ところで現実の戦争の場合は、上のようにさまざまのレベルで、虚実含めた、価値の選択が迫られるわけです。その一番処しやすい―自己の因果が自己に完結するという意味で―場合が極端な場合として、自己の戦争への非参加と生命の否定の撰択の問題があると思う。それをしも非参加を選ぶ〈ウリ宣言〉の完遂を想定すれば、〈ウリ宣言〉とはひっきょう戦場―勿論軍隊も含め―以外で死ぬことを肯じても、戦場で死ぬことの拒否宣伝ともみられます。

戦争参加に対し、自分一個で対しうる場合以外、家族・地域・国家の各レベル―各レベルは同一な、内容

をもたないが―があるわけで、そのレベルにおいても、シビアーな、例えば、自己の不参加と家族の死といった選択がありうると思います。

とすれば、そういった各レベルの選択に際しても〈ウリ宣言〉へ指向するとすれば、非戦・不戦の決意でもって、乗り越えられるだろうかということがあると思います。ウリは実行の具体的「技術」としても、家族論・国家論を含むように思います。

僕はウリに対してどうするか。「あえて反対する理由がない」ことのために加わっていません。勿論内容を胆に銘じます。銘じるだけでなく命じたく思います。家族論や国家論で、自分なりに受肉しながら。

※　※　※

高橋隆治編の「無名兵士の詩集」の解題に次の文章があるのを見ます。

『……ふしぎなことに、死の寸前にまで追いつめられながらも作者はけっして敵を罵倒しないのである。当然のことながら、憎しみこそはつのらせるのだが、たとえば高村光太郎が、同じくガダルカナル戦をよんだ詩「撃ちてし止まん」の一節のごとく相手を「卑しきやっこ」などとはののしらないのである。むろんそれはひとり吉田嘉七だけでなく、戦場の「詩人」たちは絶対に敵を「鬼畜」などとはいわないのだ。いってみれば、かれらは戦争を知っているのである……敵をののしったり、味方にかけ声をかけたりするのは、兵士たちを死地に追いやることで、自らは安全な場所でしか叫び得ぬ無責任な言辞である』

いかに、もっともらしくみえようとギリギリの当事者と、小賢しい喜劇的第三者のちがいが些細なことばのちがいから、鋭い眼光に当てられたことばだと思います。（N・T）

波紋が少しづつ

〈2号〉は雑多という感じがしないでもありませんが、本来はこうあるべきだとも思えます。多種多様で乱雑で、その中にこそ真実がありそうです。それが戦争抵抗、非暴力―直接行動という背骨に附着し、機能を始める時、自由連合の実践であるようです。そして自由連合と非暴力直接行動の波紋がすこしづつ拡がりつつあるような感じです。兵庫のO・Jさんは、多少毒気を感じますが

素直な疑問が提出されています。

しかし、承服できないのは〈近代戦云々〉の所で民衆が自ら、戦うものである以上非近代戦（ゲリラ・ストライキ・サボ）にしか、本来の勝利はありえないと思うのです。

（Y・S）

遠心的発散を

ひとつひとつの文章は何んとなくもの足りないような気もしたのですが、全部読み終った時点では、実際の厚さの三倍くらいの本を読み終えた時のような充実感がありました。それはちょうど〝非暴力直接行動〟を核として遠心的に発散してゆくような、文字通り〝運動〟のイメージです。それに何よりも驚きなのは、二十才そこそこと思われるような人の文章から、七十才を超える人の名までもがあったこと。

（T・T）

この混沌は

ひとことで言って、いろんなことが混沌としたまま投げだされているという感じがします。この混沌は産みの苦しみ（僕たちの歴史をつくるための）の表現なのか、もはや修復不可能な地点まで、お互いのホンネの部分がバラバラになってしまったことの表れなのか、実はよくわからない。

いまのような時代、つまり後退戦を余儀なくされているような局面でなお、なんとかなんとかひっかき傷でもつくろうとガンバッテいる人たちが集まると、お互いの違いよりは（当然のことながら）その志向における共通性への心情的共同の方が先に立って、なんとなくしゃべる前から「わかりあえる」という危険なところがあります。それは、一面ではたしかに、お互いが「わかりあえる」ぐらいまでは、自己を相対化しえる。ということであり、その程度の経験をつんできたことを意味するのですが、他方ではあいまいな関係に自分も知らず知らずもたれて、「わかってもらう」ことを期待するという甘えを結果として肯定していくことにもつながるのではないかという危惧がします。

いまのような時代にこそ、理論も戦略戦術もチミツで理性的であることが要求されているのではないか。

と、これは、僕自身の自戒なのですが。

（Y・T）

自由に語れる この感じを

いろいろな人の感想がのっていて集団のフンイキが感じられます。

私の立場としては、〈〝狼〟たちのやり方には、心情的に、方法的に反対である〉ということ。WRIについては〈〝あらゆる戦争に反対〟ではない〉という点で少しちがう。

といったことがあるのですが、2号のいろいろな人達の意見の中に私と同じ意見の人が見られて、それが親しみを感じさせたのかもしれません。

自由に語れるというこの感じは、そのまま続けていってほしいものです。

（W・I）

のびのびした精神

ウリ・NL・二三の水田ふう氏の文章、いまめんどうな事件に当面しながら、その文章がじつにのびのびと、真に自由な精神の自由な動きさながらに書かれているのに心を打たれました。

終りの方の鈴木国男さん虐殺糾弾集会のレポの記事—

『ふう君WRIを代表しての連帯のあいさつをすると、ウリて何や。それで反戦・救援云々の説明をすると、そのあとに立った司会氏いわく「いまごろ時代おくれの非暴力直接行動をかかげて、それでもしこしこやってるウリからのあいさつでした」と紹介して、みんな大わらい。でも、内ゲバにならず一しょに笑ってるところがウリのよいところ。つまり「断固暴力で闘う」など云ってながら、今日のデモで〈非暴力直接行動〉そのものをやってる（のに気付かない）。それが時代おくれではなく、実はもっとも時代を先取りしている（ことにも気付いていない）。暴力そのものの権力自体が、決して暴力を自ら呼号することはないのに、まるで子供のけんかのような暴力をちょっぴりふるう位のことを、時たまやらかして、それを暴力闘争なんて呼号して、自慰的に満足しているという問題を考えたこともない—でもみんなひるまず威勢のよいところ大いに学ばねばと思った』—という一章

笑いながら一ふりふるわれたムチ

が、じつはびしりとかんどころに当っていて、感銘をうけました。

（M・Y）

生活の思想

私にとってWRIは自分なりの生活思想だと思います。ですから高い知識はなくとも、しぜんに行動してゆけばよいと考えますが。

それには直接行動が必要となって来ます。たとえば、一枚のビラを配ることは、思うことと行動が一体とならなければ直接行動といえないのだと知りました。

（K・Y）

気恥ずかしくもあり、又

「なかまの声」などを読みながら我々のやっているのと較べて何となく気恥かしい気がします。そうでありながら我々の運動こそ日本における文化革命そのものであるとの自負があったり、人間とは面白いものです。

大乗仏教とは本当にバラバラで、一緒だといえる事だといわれます。

我々の仲間が直接行動を読んだりしている事自体が統一戦線という事かも知れません。

（T・J）

エピゴーネンでいい

ミニコミの紹介は非常に興味深く読みました。大変な作業だったと思いますが、こういう欄は今後もぜひ続けてほしいと思います。面白かったのは、才一号を読んだ人の多くが水田ふうさんの文章に関心を示していることで、この人たちの賛成論や反対論をふまえた上で、水田さんが次号にもう一度非暴力論をお書きになることを期待しています。才一号は向井考およびそのエピゴーネンたちのよせ集めにすぎないときめつけその例として、水田論文をあげている人がいました。僕はこの人の言わんとしていることがよく分りますがもしエピゴーネンという言葉が、誰かの影響を深く受けている人という意味で使われているなら、エピゴーネンで大いに結構だと思います。そういう意味でならエピゴーネンでない人間なんていないのですから。大切なのは、その影響の受け方自体が個性的であるということ（逆説的な言い方をすれば）模倣そのものが、

独創的であることなんじゃないだろうか。今度のような議論をまきおこすような文章をもう一度お書き下さい。

（K・K）

「助けられ人」はいない

「助っ人」＝根なし草として視る姿勢は〈土着〉と云う事をせまい意味に解していく思考につながるのだろう。〈土着〉を地域の運動として（それだけに）考える事は、今これを書いている自分をも含めて、地域で運動を行う者のおもい上りがある、そんな気がしています。

「助っ人」がいるのなら「助けられ人」＝土着の運動者もいるのではなく、そんな図式にしばりつけられるのではなく、「助っ人」が「助っ人」を助けるという事、「助っ人」と土着を別の概念で考えてみるのではなく、それは本来的に一体であるという事。そのような事を読みながら考えています。

（O・M）

この問、一つで

第一号では、向井氏や水田氏の力強い議論が中心になって、水際立ったようなよいできでしたが、第二号は、いわば雑誌の方向が内側に、仲間の方を向いていて、これはこれでいろいろ教えられました。

連載「墓標のないアナキスト群像」第二回は、その叙述のなかに筆者の存在そのものの全体像が現われてくるという種類のものです。歴史をのべて筆者の重い存在感を感じさせるのは、めったにないことで、専門家の書いた史書には、まずたいていそのようなものはありません。

そして、その筆者の大きい重い全存在が一点に集中して「『愛』運動としての……」として現われてくるとき、筆者の問いかけのはげしさ、その問いの深さに、読み手の私は胸をつかれる思いがします。いままで誰もたずねたことのない問いだと思い、この問いひとつで、この雑誌全体が支えられるくらいだ、と思いました。

（M・Y）

公の場で こたえていったら

「大逆事件の周辺で」、幸徳―管野の恋愛についての箇所とりわけ感動しました。客観的な資料と筆者の

主体性が一体となった叙述はすばらしいと思いました。「なかまの声―」の方によせられた疑問については答えられるものは、公の場所で答えていった方が（シンドイですが）読者との関係を深めていくことになると思います。（F・N）

今日的な受けとめとして

二号・さらに充実した内容に目をみはりました。一号に対する反響の多彩さ、なかまの声にも、力強い連帯の意識が感じられます。

「大逆事件の周辺で」、日本の民主主義の本流を伝える、歴史的な意味あいを深めるにちがいありません。

特に、昭和五十年の式典にからんでの天皇制批判の高まっている折から、暴虐の限りをつくした天皇制の罪業がありありと記されている事も貴重な告発資料といえましょう。

「幸徳の辛苦の足どりをたどるとき、単なる運動史としてではなく、おのずから、ぼくらの血脈のうちへと流れてくるものがあるはずである…」と、あなたは書いておられるが、そのことは、今日的な受止めの仕方で強くたくましくひろがっていく事が期待されます。しかし「周辺に読みきれぬほど、いっぱいの本をもっていて、容易に読むことができるゆえに、かえってただ一冊の本を見出し得ない、という逆説におちいっている」というお説に、この文章の存在の現代的存在理由も、正しく受止められねばなりません。

末尾の「愛」運動としての……も興味深く読みました。幸徳と管野は〈結びつかないことにおいて結びつき〉の言葉は、闘いの苛烈さを伝えます。（M・H）

日常の革命化ー性

「大逆……」は読んでいくうちに色々と印象が変わり、あの当時からの逆照射により現代の運動を批判するだけでなく具体的に示したものかと思ったけど、もちろんそれもあると思うけど、非暴力直接行動の論理展開だと思う。日常の革命化＝それが幸徳と管野の性道徳の打破であり革命と恋愛を結合する非日常性と日常性とを結合する事により、日々訓練する、しかも一方を手段化する事なく成し遂げるという事。革命とい

う名分で女性を手段化してきた、それがとりもなおさず、国家論理と同じ階級性に連らなり、失敗してきたという事、それを打破するのが、性の問題だけどこれは経済・社会・文化との相互連関の中で扱う事により一層の矛盾が浮き彫にされてくると思う。

（Y・B）

＜明治の古さ＞

「墓標のないアナキスト群像」幸徳―管野が、「同じ屋根の下に起き伏し」始めた三日から「二人がはじめて相抱いた七月頃までの」四ケ月ちかくもの「長い期間」、二人は、なぜ肉体的に結びつき愛し合うことをしなかったのか？

それは「自由思想を発行するその一点において―云うなれば、結びつかないことにおいての結びつき―その愛に、我と我身をもえたたせていた」というのが、この「愛、運動としての」の一節の趣旨だろうと思いますが、これは（私には）上の疑問を解くカギにはなりえないように、思えるのです。

二人が、自由思想の発行に努力をしている間に、「抱き合った」としたら、自由思想発行のためのエネルギーが「削がれた」であろうか？―「削がれる」として疑わないのは「性を運動の阻害物」としか見ない立場です。性を運動の阻害物視しない「運動としての性愛」という立場からは、「削がれない（少なくとも『削がれるとは限らない』）と、論理的に帰結されるのではないでしょうか？（これは、簡単な論理の問題であるとともに、精神分析の根幹にかかわる大問題です。）

「運動の阻害物としての性という概念」の＜否定＞から素直に考えを推し進めて行けば、抱き合っていたって自由思想に向けられたエネルギーが減殺されることはなかったろう―いや、肉体的に結びついていた方が、自由思想に向けられたエネルギーも増したのではないだろうか、と言うことになるでしょう。

それを二人がしなかったのは、（「外的事情」もさることながら）二人にとっては、どうしようもない「明治の古さ」によるのだろう、というのが私の解釈です。この「明治の古さ」とは無縁の現代っ子には、幸徳―管野の、このような形の愛とい

うのは、ちょっと共感しにくいのではないでしょうか。現代ッ子の「『初めて顔を会わせてから三時間後には、ベッドの中で抱き合っていた』という恋愛こそ、すばらしい恋愛だ」という感覚ならば、私も共感が持てるのですが。

（江川兌通）

高らかにうたいあげられた愛

巣鴨平民社のところは、長年の実践者としての強い意志と広い視野とそこからにじみ出る、寛容なやさしさが、読む者の心にしみ入り、それがかえって、心やましい者を、責めることにもなるのだなと、思ったことでした。先づ第一に、私が、かたくななせいで、今までどんなに、憎いわけでもない人をきずつけたろうかと、反省せずにはいられなかったのです。そうすると、そのあたりから、文章は直接、私自身に語りかけるものとなりました。

書かれたもの、あるいは語るということは、どんな場合でも、自己を語ることでしかないと言えますけれど、それより、もっと端的に、貴方は、幸徳さんと御自身を重ねて、ある事情（というより経験）を話されているのだと感じるようになりました。何度も、雑誌をとじては開き、とじては開きして読みつぎ、それから数回読みかえしました。

この原稿を書きながら、度々息をのんだと書かれていましたように、文章に感情のあふれたところが、私にも平静に読み流すことを、ゆるしませんでした。そして、結論的に言ば、この論文を拝見したことで、私は大きなよろこびと安心を得ました。貴方がはっきりと、自己の「運動としての恋愛」を高らかに、うたい上げられたと受けとり、心から祝福をいたします。

さて、低次元からとび上って、改って、女性問題としてとりあげますと、この管野観は、一人のすぐれた個性を、その時代のあだ花としてではなく、人間の生き様の、まっとうな姿として、扱われた事で、本当にユニークです。真に両性は平等であらねばならぬ、という思想と実践の上にしか持ち得ない視点だと思います。その視点から評価される事で、この愛は、不当なそしりの中から引上げられ解放されたのです。高められ浄化された愛の中では、幸徳さん

も立派ですね。

早く生れすぎたばかりに、辛苦の多かった先覚者の業績は、くりかえし、見なおされ、書きかえられねばならないと思いました。（S・M）

鮮烈な提起

「大逆事件の周辺で2」―①幸徳の三つの課題のこと②森近密告説云々のこと③幸徳とスガの関係のこと―の三つに分かれているようですが（関係の問題としては、②と③はある意味で同じ問題かも）、〝メインエベント〟である③のことをもっと書いてほしかったというのが正直なところです。〈運動としての愛〉と〈結びつかないことにおいての結びつき〉とが、ぼくの中ではなかなか結びつきません。だいぶ考えて、ちょっぴりわかりかけているのかな？といったところですが、〈運動の阻害物としての性〉というとらえ方に対して、〈運動としての性〉あるいは〈運動を進めるものとしての性〉というのではない（幸徳はもちろん向井さんもそうではないように読める）というあたりが、どうもスッキリしないわけです。しかし、〈結びつかないことにおいての結びつき〉という提起は、実に鮮烈でした。また②については、まさしく今のぼくらの問題として〈なかま〉ということを考えさせられます。このことも「助っ人論」とのからみで、ぜひとも書いていただきたいことです。（S・T）

異論あり

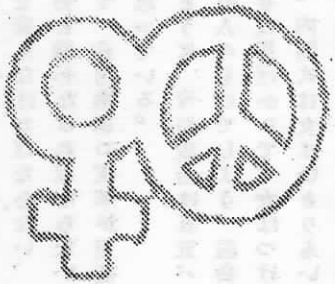
「大逆事件の周辺で2」解釈に新鮮さがあり、感動的なのは素材の故でしょうか。

森近運平のとらえ方〟関係のもろさ〟〟運動のつくり方〟について異論があります。「同志から森近が疑われたとき、幸徳はそれに同調して非難したのではない。といってまた積極的な味方となって森近を守る―と云うことではなかった。…」

私の考え（推論）でなぜ森近を守らなかったかといえば、それは彼の著書（森近運平著）〟社会主義綱要〟（明治四十年）にあるとするのです。この著書の内容は当時一般にそうであったように、マルクシズムと

アナーキズムが混在しているのですが共著者は堺利彦です。知っての通り幸徳は社会党第2大会以来、田添―片山派と対立すると共に堺とも思想的に対立せざるを得なかった。それは例えば百人町時代、堺が幸徳を訪ねた時、集会があるからとして、堺を入れなかった挿話でも判りますし、貴方が指摘されたようにもし幸徳にとって〝パン略〟が思想形成の重要な支柱になったとすれば、共産党宣言の共訳者に対し、友人として親愛はしても、思想を共にした共働はあり得ないとするのが論理的でしょう。

そして、森近は人間的には素直で（他に坂本清馬だって素直で直情ないい青年でした）郷里で青年子女に新らしい農政を教えるほどの人でしたが、〝綱要〟で彼の思想をみるかぎり、アナーキズムではなく、マルクス的経済論の受売りなのです。少くとも幸徳派ではなく、堺派だったと思います。従って古本屋開業鑑札に関するデマは論外として、幸徳が積極的に〜しなければならない理由はなかったと思います。

かような言訳はセクト的で、だから大同団結した運動は糸口さえつかめないのだ…と思われるかも知れないが、思想的純化とはそういうものなのであって、また幸徳から擁護してもらって、森近が幸徳の周辺にとどまり得た…としてどうなるものではない、とするのが私の考えです。同じ発想法は本文六七頁「やゝ我田引水的になるが〈直接行動〉創刊号に対する仲間からの感想や批判は…」に見受けられます。〈仲間としての読みとり方の不足〉が私などにも当てはまると思いますがなれ親しんで無反響に過ぎると申し訳ないので、あえて異論を立てました。

（H・Y）